

仕事というもの

校 長 武井 正明

幼い頃の父親の記憶は、自動販売機のタバコを一生懸命補充している姿だ。

「お父さんの仕事はタバコの入れ替えだ」まさかそれが総てであるわけではないが、親父は息子たちに、よくそう言っていた。

とにかく四六時中、自販機を廻って詰めての繰り返し。今の万代シティ、昔とあまり変わらない。日曜日、私は弟と仕事の親父によく一緒についていった。2階の本屋や広場、ふたりで時間を潰し、1階のバスセンターそば屋の賄いで店の人と一緒にイカ天そばを食べた。そうやって親父の仕事が終わるのをふたりで待つ…。

日曜も働くのが当たり前の時代。とにかく毎日働いていた。日本中がそうだった。

私は机に向かって書類を作成したり、ネクタイを締めた会社の人たちと会議をしたりするのが高級な仕事だと思っていた。もちろん我が家には書斎などという気の利いた部屋はない。父の持ち帰り仕事は、いつもテレビが点いている居間のテーブルでやっていた。

だから父親の仕事は誰でも出来る「少し低い」仕事だと思っていた。

しかし、そういう誰にでも出来るような仕事の積み重ねの毎日があって、自分が何不自由なく生活させてもらっている、ということは見ないようにしてきた。

そしてやがて知るのである。

自分が自分で金を稼ぎ、家族を養うようになって、ようやくわかるのだ。

誰でも出来る仕事を、どんな雨の日も風の日も、暑い夏も寒い冬も、少々体調が悪くても毎日継続することは誰にでも出来ることではない、ということ。そういう人ほど「家族のために」という言葉を口にしない。見返りを求めず、照れ笑いで返すだけだ。

そういう父親のおかげで、ここまで育ててもらった…。

2年生は昨日から3日間の職場体験学習に入っている。

吉田の、燕市の、新潟県の、日本の未来を背負っていく君たちだからこそ、先輩方は自分たちの仕事の時間を割いて、経験という財産を与えてくださるのだ。

たった3日で仕事の厳しさなど、わかるはずもない。しかし…

今回ご協力いただく職場の多くの方々も、若い君たちに伝えたいメッセージがきっとあるはずだ。私は君たちに、それをしっかり受け取ってきて欲しいと期待している。

自分は将来どんな仕事をやっているのか？ どういう職種が自分に適性があるのか？
意外と「その時」はそう遠くないのです。